

高等学校における小説の指導

——芥川龍之介『藪の中』を中心に——

三 浦 和 尚

はじめに

近ごろの高校生は変わったと言われる。昔から、「近ごろの……」というの言われ続けてきたことだから、本質的なものは変わっていないのかもしれないが、一教師の実感としては、やはり自分の世代とは違うという印象をぬぐい切れない。本とのかかわり方ひとつとあげても、それは同様である。

世に小説というものがあふれながらも、それははつきり、娯楽傾向にふくらんでいつているにすぎない。十年前までは良書の指針であった文庫本が、今は経営の糧とされ、文庫だからどうかつに言っておれない時代である。

そういう中で、いまだ小説を吟味する力をもたない高校生が、推理小説やアクションものに走り、そのおもしろさにとどまるのは、ある意味ではやむを得ないことなのかもしれない。しかし、私達国語教師がその実態を傍観し、認めているわけにはいかない。むしろ、そういう実態であるからこそ、よいものを読ませ、目を開かせてい

くことに力をそそいでいく必要があるのではあらうと思われる。

それは具体的には一つに読書指導の実をあげることであり、一つに、授業で小説の楽しさを心から味わわせることなのではあるまいか。以下、小説教材の指導のあり方について、教材と方法の二面から考察していきたい。

一、小説教材の指導にあたって

(1) 教材について

原因はさまざまに考えられようが、ともかく、高校生の活字離れは確実に進んでいる。情報の多くを書物にたよる必要のない時代・世の中となっているのだから、ある程度は仕方ないにしても、映像等で代えることが困難な部分、例えば深い思考力にかかわるところとか、文学的想像力にかかわるところとかいった部分についての活字の必要性が減じているとは思われない。

そういう点を前提として考えれば、先に述べたように、読書指

導の今日的役割は大きいといわざるを得ない。そして、授業についていえば、まず、教材自体を吟味していく必要がある。

実態として具体的にあげてみよう。

例えば「舞姫」は、テーマもわかりやすく生徒も我身になぞって考えることができる点で、よい教材であろうと思う。しかし、あの冒頭あたりの言語抵抗と、それ以上に長さの問題がある。教科書にして二十九ページ（尚学図書「高等学校新選現代文」）という長さは破格である。それに耐えさせる工夫というのは、実際には相当困難なのではあるまいか。

「山月記」は、長さはともかく、言語抵抗が強い。「舞姫」同様、生徒に考えさせるものを持っており、結果的には生徒にも好評な教材であると思っているが、あの漢文訓読調は、我々には心地よいものであっても、生徒の中には耐えられない者もあるようである。朗読テープを最初に聞かせるのは一方法のようである。

「檸檬」「闇の絵巻」など、梶井基次郎の作品は、全体としてとらえどころがないようである。ああいった感性、描写の巧みさなどを見る目がないことは先にのべたが、そういう状況の中でこれらの作品を扱うことは大変難しいように思われる。生徒の感性にまかせる授業方法が可能ならばよいが、裏目に出れば、教えてもらった気がしないという不満がつのる。教師にも生徒にも、ある種の割り切りが要求される教材であるが、梶井の作品のおもしろいところは、少数でも必ず熱烈なファンがいるか、あるいはできることである。

安部公房の作品「棒」「赤い繭」なども少数の熱心なファンを得ることにはなるが、生徒の多くはあの寓意に必ずしもついてい

てはいない。やっぱりよくわからないといった状態で終わっているようである。授業も、そういった生徒を反映し、教師の言葉数はかなり多くなり、生徒はそれをただ拝聴するという結果になりかねない。全部をわかった気にさせることが、かえって危険をはらんでいることは承知の上で、なおやはり、難しいとの印象をぬぐい切れないのが安部公房の作品である。

以上、いくつかの作品をあげて言及したが、私自身はこれらの作品自体を教材として否定しているわけではない。私自身にとってみれば、むしろ好きな、教材としても愛着ある作品といった方がよいくらいである。それぞれの作品の高さは言うまでもなく、教材のバラエティという意味でも、他の作品に代えられぬものを持っており、よくわからなくても読ませておくことの必要性が主張できる作品だと思っている。ただ、それぞれの作品の、今日の生徒に与える教材としての長所・欠点を適確にみておきたいということである。そのことよって、指導方法の考察が、よりたしかなものになっていくことはまちがいないからである。

さて、まとめて、それではどのような教材が適当かというふうに考えてみると、教科書編集にあたられる先生方の苦労がよくわかってくる。

あまり長くないもの、言語抵抗の少ないもの、寓意的・象徴的にすぎないもの、とごくあたりまえの規準があがるのである。

ただ、あえてつけ加えるとすれば、まず物語に展開・起伏のあるものがよいように思われる。梶井の「闇の絵巻」のような作品は、やはり扱いが難しい。自分の力不足を露呈して言えば、やることが

なくなってくる、読んでわかってくれとしか言いようがなくなってくるのである。

また、主題が比較的はつきりしている方がよいようである。これは主題がひとつに絞れるとかいうレベルではない。『山月記』や『舞姫』などのように、何が問題とされているのかはつきりする作品ということである。それは、裏返していえば、生徒自身が（自分の問題として）考えていく手がかりを得やすいということでもある。そういった意味では、『羅生門』（芥川龍之介）が安定教材であることに納得がいくであろう。

(2) 指導方法について

高等学校を卒業する生徒に、程度の差こそあれ、ある程度小説の読み方のようなものが身につけており、自ら小説を手にし、生活を豊かなものにしていくという態度が形成されるべきだとするならば——実際そうありたいと願っているのだが——一方で小説読解の基礎的技能を身につけさせる時間と教材が設定されねばならず、また一方で、授業の展開を生徒自身の読みにそって進め、主体的に読んでいくという方向性を示してやる必要があると考えている。

教師の読解のあとを授業で生徒にたどらせるのではなく、生徒自身の読解を授業にとり入れ、課題化していくことではじめて、自ら読み楽しもうとする姿勢が形成されるのではないかと思うのである。

そしてそのことは、受身的にものごとをとりえる傾向にあり、また読書経験の乏しい現今の高校生に、切実に要求されていることではないかとも思うのである。

そのための方法として、たとえば次のような方法が考えられるであろう。

1、一次感想や疑問点を集め、それをもとに課題設定し、考えさせていく。

2、少人数の討議の時間を設定するなどして自由に考える時間を確保する。

3、読みのと中にでも多く書かせ、それによって生徒同志の読みのがちがいを明らかにし、つきあわせ、話しあわせる。（今回の「飯の中」の指導はこのかたちである。）

4、表現活動を生徒の学習目標とし、生徒自身の読みがあらわされるようにしていく。（感想をまとめる。脚本化する。後日談を書く。他の登場人物の目で事件を再構成する。朗読を工夫する。

等々）

その他、いろいろな方法が考えられるであろうが、ともかく、生徒自身が登場する授業、生徒個々の読みが深められる、あるいは生徒個々が自身で何らかのものにたどりつくためのゆとりのある授業というものがめざされなくてはならないのではあるまいか。

極論といわれるかもしれないが、最終的には、生徒一人ひとりが自身の読みをたしかめ、課題意識のようなものをそれぞれが残すかたちになっていけば、授業というものはよいのではないか。教師がひとつのテーマを示して終わるといふかたちにならなくてもよいのではないかと考えている。ただし、これは、生徒に学習したという実感を与え得ないという懸念もあるので、実際のところ授業として成立させるのは容易なことではないであろう。

二、芥川龍之介「藪の中」の指導

以上のような考え方を意識しつつ実践したのが芥川龍之介の「藪の中」である。

△指導の実際▽

1、対象 広島大学附属高等学校二年五組(男子二十四名、女子十

五名計三十九名)

2、期日 昭和六十年七月

3、教材 芥川龍之介「藪の中」(三省堂「新国語Ⅱ」)

4、目標

ア、構成や内容的対応に注意させながら、短編小説のおもしろさを味わわせる。

イ、作品から読みとることのできる人間観について、考えさせる。

ウ、他の人の考えをうけとりながら、話し合い、自分の考えをまとめ、発展させる態度を養う。

5、指導過程

第一時 構成をとらえる

。作者・作品についての説明。

。通説。

。構成をとらえる。——前後半に二分する。

関係者の証言——事実設定

当事者の告白——くいちがい

第二時 当事者三人の告白の検証

。どういふ事件かを明らかにする。

。三人の告白のくいちがいをたしかめる。

。殺した(自殺した)動機をまとめる。

第三時 作文

。課題 ①○○の言っていることが正しいように思う。なぜなら……。

②○○と△△の……といったくいちがいがから、次のよ

うなことを考えた。

いづれかの内容で六百字程度で書く。

第四時 作文をもとにした話し合い

。当事者の真実を語る必然性について

。多妻丸は処刑される身。真砂は清水寺でのざんげである。

。武弘はすでに死んでいるわけであるからうそを言ってもしかたがない。といった点を確認。

。生徒作文(後掲資料①)～③) 通説

。資料の①は多妻丸犯人説、②は真砂犯人説、③は武弘自殺説である。通説の後、それぞれに対する反論を出させた。様

々な考えが出て、授業の中でいちばん盛り上がったところであるが、やはり芥川の計算どおり、決定的な証拠はないとい

うことである。

。生徒作文(後掲資料④)～⑥) 通説

④)～⑥)の作文は、だれが犯人ということに必ずしもこだわ

っていないものである。これらを読ませた後、自由に考えた

こと・感じたことを発表させた。その中では生徒たちは、④

の作文の中にある「虚栄心」ということはにこだわりはじめ、
⑥の作文の構成への言及とからめて、だいたい主題らしきもの、問題とされていることがらにたどりついていったように思われる。

第五時 まとめ

。「簞の中」という題の意味について

。味読

。作品のそれぞれの部分に、男女、声質など考慮しながら生徒を割り当て、そのつもりになって読むよう指示して味読とした。

三、考察

(1) 教材としての「簞の中」

指導にあたっての教材観のようなかたちで、教材としての「簞の中」について少しのべてみたい。

従来、芥川作品は、中学校の「トロッコ」をはじめ、「羅生門」

「舞踏会」「枯野抄」など多く教科書にとられている。しかし、「簞の中」は、今回の三省堂にはじめて採択されたものであるという。

芥川作品としては評価の高いこの作品が、これまでとりあげられなかったのは、その内容に不穏当な部分があるということなのであるうか。たしかに、若い夫婦が賤にねらわれ、妻は夫の前で乱暴される、夫は結局死んでしまう、という事件は、事件としては衝撃的であり、救いのないものである。また、教室で扱う際、「てごめ」といっ

たことなどは、余計な気づかいをせねばならぬということはあるかもしれない。さらに、登場人物の装束の描写などは、古典の世界のものであり、少しとっつきが悪いということもあるかもしれない。しかし、この作品は、教材として次のようなすぐれた点を持っていると考えられる。

1、長さが適当であり（教科書二段組にして十一ページ）、全体が七つの部分にはっきり分かれているので、読みが心理的に楽である。

2、すべてが語りのかたちになっているので読みやすい。また、生徒に部分を割り当てて読み分けるといった工夫もできる。

3、一読後、必ず「どうなっているんだらう」といった疑問をいだく。それは決してとりつくしまのないようなものではなく、精読のバネになっていくものである。また、推理小説を読むような気持ちで入っていくという気軽さがある。

4、構成の分析、事実のつきあわせなど、読みの基礎作業の段階がはっきりしており、生徒に学習しているという意識をもたせやすい。

5、作品の部分部分からでも、さまざまな人間像を読みとることができる。従って多様な読みの段階、多様な到達点が存在しうる。
6、巧みな（特異な）構成、緻密な対応、描写の緊密性など、作品としての完成度が高い。

以上の中で、6は当然といえば当然であり、1、2、4は特にとりたてるほどのものではないかもしれない。しかし、5については、教師の読みを押しつけ、生徒自身の読みの楽しさを奪うこと

になりはしないかという、小説指導の際のひとつの懸念をぬぐい去る重要な要素であるように思う。こういった要素をもつ作品は、意外に少ない。

また、3について言い方をかえれば、生徒は推理小説を読むような感覚で学習に入ることができ、そして重い課題をかかえて出ていくということになるであろう。高校生の読書の実態を考えてみると、こういった、軽く入って重く出ていく、といった作品の存在は貴重である。そして、こういった作品を、意識的に高校の学習の前半に設定し、読む楽しさを抵抗なく味わわせることが必要なのではないかと考えたりしている。

(2) 生徒の読みを生かす授業

今回の指導について、私は大きく二つの段階に分けて考えている。第一段階は内容を検証する段階、第二段階は、読みを深める段階である。

第一段階は、構成を読み、事件のあらましを、書いてあるとおりにたしかめる作業が続く。この段階では、「なぜ?」といった発問はほとんどない。「どついう事件か」「どこが違うか」といった発問のもとに、生徒自身が読み改める作業をくり返すのである。その作業は、知的興味にひきずられて活発に行われた。

第二段階は、第一段階でたしかめた共通認識をもとに、読みを深める段階である。作文を書かせ、その段階での読みとりを各自にたしかめさせる。その際、課題はより具体的にそのままのことで書き出せるように工夫した。この段階では作品の全体像をとらえ得て

いる生徒は少なく、書きづらいためである。

さらに、いろいろな観点で選んだ生徒作文をプリントし、読ませ、一度生徒を混乱の中におとし入れ、自身の読みを改めて創りあげさせる。この段階も、先に記しているように改めるための検証と読み深めという二つの段階を設定し、ゆるやかに授業進行している。この段階を急ぐと、結局は教師がひっぱるようになる。生徒の思考を保証するために、教師は教室の沈黙に耐えねばならない。

こうしてふりかえてみると、この授業では教師の講義という場面がほとんどないことに気づく。あるといえばわずかに導入の作品説明の部分くらいである。あとは生徒の作業指示、そのまよめの司会、話し合いの司会といった役割である。その中で生徒がいかに動いたかという点が授業の成否となると思われる。その判断は難しいが、指導者の主観で述べれば、生徒は実によく考えていた。教材の力に負うところが多いのは無論のことであるが、教師が前面で引っばらない授業によって、生徒自身があれこれ考え、何らかのものに到達する過程が確認できたように思われる。

(3) 反省

1、語彙指導がなされていない。語句としては結構難しいものがあるにもかかわらず、指導上出てきたものをそのつどたしかめるというかたちで、語彙指導の計画は作られていなかった。

2、第二時の当事者三人の告白の検証がおおまかであった。もっと各人の心理に深く追及するようなかたちでつっこんでいくべきであったと思われる。結果、推理小説の域を出ないまま読み終

えたものもいるように思われる。ことは二時間かけてもよいのではないか。

3、生徒それぞれの読みの到達点がたしかめられ、評価されていない。できれば最後に感想なりを書かせて、生徒自身にも、教師にも、まとめと評価がなされるべきであった。この点は、こういった指導法をとるとき、大変重要な点であると思われる。

おわりに

以上、『鑑の中』を中心にまとめみると、高等学校における小説指導のあり方として、

1、まず平素の読書指導の実をあげていくことが必要ではあるまいか。

2、軽く入って重く出る、といったことが可能な教材を発掘し、意識的に一年生あたりに設定していくことが必要ではあるまいか。このことは、小説への抵抗を除き、また、中学校とのつなぎの役割といった意味もあると思われる。

3、自身が読み深める楽しさを味わわせるために、指導方法として、生徒自身の読みを中心にすえて表面化させていくことを考える必要があるのではあるまいか。

といった点を切実に考えるようになったということである。今後ともよりよい教材、効果的な指導をもとめて実践を重ねていきたいと願っている。

△授業資料（プリントしたもの）V

① 多妻丸説

多妻丸の言うことが正しいと思う。それは、つかまってしまうて男の殺人について問われた時に、してもない事を言うはずはないし、やがてすぐに死刑になってしまう身で嘘をついてもしかたがないからである。それに多妻丸にとっては誰が男を殺そうと面目も何も関係ないが、男としては人に殺されたというより、自分で決めた上で自殺したとする方が、自分にとって都合がよいはずだ。胸へ刀を刺して苦しくないというのは、盗人に殺されてしまったまだ残っている自分の意志・精神というものを自分でケリをつけて完全に死んでしまった事を、意味していると思う。

女について言えば、自分が手ごめにされてそのまま逃げて来たと言えば、もうどこにも行くところもないし、言いわけもできないが、こうなった以上夫を殺して自分も死ぬつもりだったと言えば、少しは世間も同情してくれるというこんな人がありである。そしてなぜ死骸の縄を解き捨てたかも知意味不明であり、都合を合わせた証言に思える。男はもう死んでしまったし、多妻丸も死刑にあう身であるのを良い事に、うまく生き延びた自分を正当化する言い分けてあったように感じる。

ついでに言えば男の証言の中で出てくる「忍び足に、おれのそばへ来た」人は、彼の妻であると思う。それはこんな鑑の中へ来る人はそういないし、男の人が殺されているのを見て何もあわてず刀を抜くということは、その場にいた人としか思えないからである。だ

から男の証言が正しいとすれば女の証明は明らかに違ふし、その逆も同じことである。

② 真砂説

まずはじめに結論から述べると、男を殺した犯人は男の妻だと思ふ。なぜそのように考えたか、事件の当事者それぞれについて考えたいと思ふ。

まず多裏丸である。彼が男は自分が殺したと言つたのは、自分の腕前をじまんしたかたにすぎないと思ふ。放免の物語の中で、彼は名高い盗人であると書いてある。ということは、捕えられてたがすむはずもない。おそらくは、死刑になるであろうから、最後に自分の名を、腕のたつ盗人として世間に知らしめようとしてそのような事を言つたのではないかと思ふ。

次に死霊の話である。この男は、手ごめにされた妻に対して、さげすみや憎しみといった感情を持っていたため、妻が人間として最も憎むべき言葉を発したように言つたのではないかと思ふ。又、自殺したように言っているのは、自分を美化しようとしているのではないかと思ふ。妻に裏切られ悲嘆にくれての自害というと、世間の同情も集まることだろう。それに見えない手がそつと胸の小刀を抜いたのを感じたところ、できすぎているかと思ふ。よつて死霊の言つた事はうそではないかと思ふ。

それではなぜ、妻の言つた事はうそでないと思つたかというところ、それは妻の証言が、観世音菩薩への懺悔の言葉であるということからである。相手は菩薩であるのだから、うその懺悔をしてもすくば

れてしまふのではないであろうか。それならば懺悔の時にうそはつかないだろう。よつて女の言っている事が真実だと思ふ。

③ 武弘説

男の言つことが正しいように思ふ。なぜなら次のように考えられるからだ。

もし多裏丸の言つことが本当ならば、男が死んだ時には女はもうその場所にはいなかったことになる。すると女はこの男の死んだ様子は分からないことになる、けれども女が懺悔している時の描写は非常に正確なので、女は男の死んだ様子を知らないと考えられる。するとこの二つの事は矛盾するので多裏丸はうそをついていることになる。

女が殺したと考えると、男は死んでから縄を解かれたことになる。しかし男の霊は縄が解かれたことを知っているので明らかに縄は死ぬ前に解かれている。するとこの二つの事も矛盾するので女が殺したのではない。

こうして考えると事実は男が自殺したことになる。最後に男の小刀をぬきとつたのは戻ってきた女であろう。女はこうして男の死んだ状態を知つたのであり、夫をおいつめた自分を反省し罪をかぶつたのだ。多裏丸が状態を知つたのは検非違使につかまり調べられた時に、検非違使自身にきいたのだろう。そこで女が殺したとも思つたのだらう。彼は犯人をかばうためにやはり罪をかぶつたのだ。他にも考え方はいろいろあるが、三人とも男の死んだ状態を知るにはこの考え方が最も適していると思ふ。

④

男はいっただれに殺されたのか。この答はわからない。しかし三人の告白のうちだれが正しいのかと聞かれたなら、ぼくは三人ともそをついているのだと思う。

なぜこう思うかという、作者がこの小説で人間の虚栄心を表したかったのだと思ったからだ。つまり三人が三人とも自分の都合のよいように事実を変えてしまったのだろう。……

と今まではこのように考えていたのだが、もし作者が人間の虚栄心でなく、人間の間に起こる誤解のむなしさを表そうとしたと考えるるとつぎのようなことを考えた。

。女の方では男が冷たい目で自分をさげすんでいると思っていたのだが実は男は女をさげすんだのではなく多襄丸の言うことを聞いてはいかんと言いたかった。

。女がどちらかが死んでくれと言ったのを、男の方では自分を殺せと言っているように聞こえた。

という具合に考えると三人とも思い違いをしていたので語に矛盾が生じたのではないか……。

ではなぜ三人とも自分が殺したというのか、それは実際に殺していない者まで聞き直って、自分が殺したと言ったのでは……と思うのだがあんまり自信がない。

⑤

私の考えでは、みんながそれぞれ真実を言い、みんながそれぞれ

ウソを言っていると思う。しかし、全て真実やウソを言っている人はいないのでないかと思う。

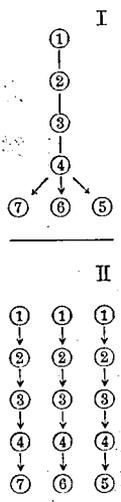
まず、誰が殺したかということを考えないでおく。女が夫の目の前で多襄丸にやられた後、夫は女の言ったとおり、さげすんだ目で女を見ていたと思う。その後、女は自分も死ぬが、夫も死んで欲しいと思つたと女は言う。自分も死ぬかどうかは分からないが、とにかく夫を殺したいと女は思った。それは女・夫の証言両方に共通する。多襄丸の証言で「どちらか一人死んでくれ」と言っているけれど、それから夫を殺したいとは行かないまでも、夫を殺す意思が全然ないわけではなかった。それで、女は夫を殺したところで、はたして女のメリットは何だったのか、別に多襄丸についていくといつても、女が望んで多襄丸の所へいくわけでもなく、夫を殺して、自分のプライドを守るといっても、殺人犯になつてまで自分のプライドを守り通す、それ程の女だったのであるか？もし、自分のプライドを守りたかつたら（つまり恥をかいたまま自分が生きていくのがいやだつたら）自分で命を断つたと思う。だから、私は、女が夫を殺してメリットなど何もなく、とにかく、自分さえこの場から逃れられれば、後はどうにでもなれといった考えを女が持っていたのではないかと思う。自分が助かれれば、多襄丸を何とかだまし夫の命をたえ多襄丸にとられても、その場を自分が逃れられればそれで良かったのだと思う。では何故、女は懺悔の時でさえウソをついているか。それは、いつでも女というものは、自分を良くみせたいもので、それがどんな所であろうと、自分を良くみせられれば、ウソをつきとおすものなのです。

⑨

犯人は○○だ！とはっきりと言えればいいけど、これは残念ながら文学作品で推理小説ではない。文学作品を深く追及しすぎるのはよくないからこれ以上書くことは放棄しよう、と一瞬思いましたが。

「1、○○の言うことが正しいと思う。なぜなら……」に対する、自分の答—三人が三人とも正しい。人間が、ある状況におちいつたときの行動を一つの事件からおこる結果として書いているのが本書だから。この文章の構成はIのようにたぶんなっていると思う。

(①とは1段落を示します)



この本はIIのように分解できてそれぞれ独立できる内容をもってます。このことから、三人は三人とも正しい、と思ったわけです。

そんなわけだから「2、○○と××の——といった食い違いから次のようなことを考えた」という問いかけには、答えることはできません。

結局、作者は①と⑤の文章では(甲)を言いたかった。①と⑥の文章では(乙)を言いたかった。①と⑦の文章では(丙)を言いたかったのではないかと思います。

この三つをまとめて書くことで別の(丁)という効果もねらったのかもしれない。

勝手な推論でまだよくわかりませんが、自分ではこう思います。
(広島大学附属高等学校教諭)